「思う」の多義構造再考
—文法化の進んだ「と思う」の位置付けをめぐって—

A Reconsideration of the Polysemic Structure of *Omou*:
With a Focus on a Grammaticalized Form *To-omou*

高橋　圭介
福島工業高等専門学校一般教科
Keisuke Takahashi
Fukushima National College of Technology , Department of General Education

(2009年９月18日受理)

The purpose of this paper is to show the semantic relation between basic meanings of *omou* and meanings of a grammaticalized form *to-omou*. In this paper we use a cognitive linguistic approach in order to describe the polysemic structure of *omou*. The results of this study show that meanings of a grammaticalized form *to-omou* derive from basic meanings of *omou* by metonymy. We would like to claim that it is possible to treat meanings of a verb and meanings of a grammaticalized form equally.

Key words: *omou*, usage-based model, polysemy, metonymy, grammaticalization

1. はじめに

思考動詞（人間の精神活動を表す動詞）の一つである「思う」は、引用節を伴い、かつ基本形で文末に用いられた場合、「だろう」のようなモダリティ形式に近い意味を表すことがある。

(1)　「あいつ、大学来てるかな。」
　　「はあ、来てると思います。」
　　（森山（1992）の例文（5））

上の例における「と思います」は、「でしょう」「はずです」といった、＜断定保留＞を表す形式に置き換えても、文全体の意味が大きく変わることはない。

すなわち、この種の「と思う」は、文法化（grammaticalization）[1]が進行しつつある形式と言えるのである。

このような、文法化の進んだ「と思う」は、モダリティ研究の進展に伴って盛んに取り上げられるようになり、記述の精度が飛躍的に高まった。結果、現時点において「と思う」そのものの意味記述は、すでに一定の水準に達している。

その一方で、問題となるのが、「と思う」が担う意味を本動詞の意味（の一つ）として扱うべきかどうかという点である。これまでの「と思う」研究を見ると、「と思う」の意味を本動詞の意味ではなくある種の条件を満たした場合に顕在化する用法の一つとして扱うか、もしくはその点に言及していないかのどちらかであり、本動詞の意味として積極的に認定している論考はない。

この点に関し、本稿は、「と思う」の意味を、「思う」が担う他の意味と同様、動詞の意味の一つとして扱う立場をとる。その上で、他の意味との（意味的）関連性を明らかにすることが本稿の目的である。

以下、まず２節において、本稿が分析にあたって拠り所とする理論的枠組みについて述べる。３節では、「と思う」を扱っている先行研究の整理・検討を通して「と思う」の特徴をまとめる。４節では、高橋（2003a）の記述に基づき、引用節を伴う「思う」の意味（本動詞としての意味）を確認する。５節では、文末の「と思う」が担う意味と、４節で確認した（本動詞としての）「思う」の意味との関連性を明らかにする。６節は全体のまとめと補足である。

---

(1)　「文法化」とは、概略「内容語(動詞や名詞など語彙的内容を持つ要素)が機能語(語彙的内容が希薄な助動詞や前置詞・助詞など)に通時的に変化すること」(辻(編)(2002：231))を指す。詳しくは Hopper & Traugott (1993) 等を参照。

2. 本稿の理論的枠組み

本稿では、以下、「使用依拠モデル（usage-based model）」が示す言語観に基づき、分析を進める。

使用依拠モデルとは、実際の使用によって刻々と変化する言語の動的な側面を重視する言語モデルの総称である。ラネカー（2000：61）に従えば、使用依拠モデルは、「非還元主義的」で「ボトムアップ的」な性質を持つ。すなわち、我々が言語的知識を形成する際、複数の具体事例からスキーマ（共通性）を抽出することによって徐々に複雑なネットワークを作っていくという、ボトムアップ的な認知プロセスを重視する立場である。その点、普遍的な規則の追究に重きを置く（「還元主義的」で「トップダウン的」な特徴を持つ）言語理論とは対立する言語モデルと言える。

自然言語には、一般的規則にあてはまらない例外的事例が数多く存在する。また、我々が実際に言語を使用する際には、（仮に抽象度の高いスキーマが抽出可能な場合であっても、）より抽象度の低いスキーマを参照する傾向にある。例えば、本稿で扱う文末の「と思う」からは「引用節＋と＋思考動詞（基本形）」というスキーマが抽出可能であるが、「と思う」の多用により（そのようなスキーマ的知識を前提とすることなしに）「と＋思う」全体が一つのユニットとして認識されうるということである。使用依拠モデルは、以上のような、我々の言語使用に見られる傾向、さらには（我々の言語使用の産物である）自然言語の性質を適切に捉えることができるモデルであると考えられる。

使用依拠モデルが有する特徴にはさまざまなものがあるが、ここでは、以下の分析に密接に関わるものとして次の二点を取り上げる。

①定着度の高さの重視

②辞書と文法との原理的な区別を行わない

まず、一点目は、実際の言語使用を重視する使用依拠モデルの基本姿勢から導かれる自然な帰結である。ある言語形式の使用頻度が高くなるにつれて、その形式の（我々が有する言語知識内における）定着度は確実に増していく。その結果、それまでは複合的な単位とみなされていた言語形式が一つのまとまった単位として認識され、さらにはそのような認識が形式面にも影響を及ぼすことがある。例えば、本来「（失敗し）て＋しまう」と分析されていたものが一つの単位として認識され、さらには「（失敗し）ちゃう」のように形式的な変化をも生じさせることがある。本稿の考察対象である「と思う」も、同じく「と＋思考動詞」というパターンを内在する「と考える」「と信じる」に比べ、使用頻度が高く、それに伴って意味的な定着度も一定の高さに達していると考えられる。

二点目は、要するにrule/listの誤謬[(2)]を否定するということである。語彙的知識の集合である辞書と、語を組み合わせて文を算出するために用いられる文法規則とは、そもそも次元の異なる言語知識であるとの見方に対し、使用依拠モデルでは、語レベルであろうと文レベルであろうと記号（＝意味と形式の結びつき）であることに変わりはなく、ただサイズが異なるだけであると考える。語の配列に関する[[V][NP][NP]]のような規則的パターンも、*send me a package*のような具体事例からボトムアップ的に抽出されるものであり、また記号的構造体であるという点で語彙項目と質的な違いは存在しないということである。

形式面でのサイズの違いだけでなく、意味の抽象度の違いもあくまで相対的なものである。いわゆる内容語と機能語の（意味的）差異も程度問題であり、常に明確な線引きはできないと考える。それよりもむしろ、両者ともに記号的構造体であることを強調するという見方が使用依拠モデルの特徴である。

以上を簡潔にまとめると、当該表現の意味が十分に慣習化している（一定の定着度を有している）とみなすことができれば、抽象度の違いにかかわらず、その形式の意味として認めるということである。

本稿では、以下、このような言語観に基づき、「と思う」の意味分析を進めていくことにする。

3. 「と思う」研究概観

文末の「と思う」を考察対象とする研究は非常に多く、主なものだけでも森山（1992、1995）、Yokomizo（1998）、宮崎（1999、2001）、小野（2005）、湯

(2) rule/list の誤謬とは「規則とリストは相互排他的であり、ある言語表現が一般的な規則から派生することができるのなら、その表現はリストとして挙げる必要はないとする誤謬」（辻（編）（2002：40））のことを言う。

本（2005）などがある。

以下では、先駆的な研究である森山（1992）と、文法論の立場から森山（1992）を再検討している宮崎（1999）に基づき、「と思う」の特徴を概観する。

3.1 森山（1992）

森山（1992）は、「と思う」の基本的意味を「個人情報の表示」とした上で、「と思う」の用法には「不確実表示用法」と「主観明示用法」があると述べている。

以下の例（2）における引用成分「(あいつが大学に)来ている」は、潜在的には誰にとっても確認可能な事柄、つまりは「一般的事実」として解釈されうる情報である。

（2）　「あいつ、大学来てるかな。」
　　「はあ、来てると思います。」
　　（例文（1）を再掲）

このような「客観的情報」（共有可能性を持つ情報）に「と思う」を付加することで、その情報があくまで個人的な情報であることを断り、結果的に「不確実」を表すというのが「不確実表示用法」である。

一方、以下の例（3）（4）における引用成分「日本の医療制度は間違っている」「乾杯したい」は、あくまで思考主体の個人的な判断・意向であり、従って共有可能性もなく、一般的な事実としては解釈されない（されにくい）情報である。

（3）　日本の医療制度は間違っていると思う。
（4）　乾杯したいと思います。
　　（森山（1992）の例文（23）（27））

この場合、引用成分がすでに「主観的情報」であることから、「と思う」が新たに引用成分の情報論的性質を変更することはなく、単に主張を和らげるといった機能を担うにとどまる。これが「と思う」の「主観明示用法」である。

3.2 宮崎（1999）

以上のように、引用成分を大きく二つのタイプに分ける森山（1992）に対し、宮崎（1999）は引用成分を「スルと思う」「シタと思う」「ダロウと思う」等、さらに詳細に分類し検討を加えることによって、森山（1992）の議論を精緻化している。

まず、森山（1992）の「不確実表示用法」に関しては、引用成分を話し手の＜判断＞から＜事実＞へと読み替えることによって生じていると述べている。つまり、森山（1992）によれば、「あいつは学校に来ていると思う」から「と思う」を除くと「事実としての文」（p. 106）を伝えることになる（文の意味が変わる）が、これはそもそも話し手の＜判断＞を表している引用成分「あいつは学校に来ている」を、＜事実＞を表す文として読み替えているのだ、というのが宮崎（1999）の主張である。すなわち、この場合の「と思う」は文の意味を変更するのではなく、あくまで引用内容が話し手の＜判断＞であることを明示しているにすぎない、というわけである（なお、ここでの宮崎の主張は、「あいつは学校に来ている」という同一の形式に対し、＜判断＞読みと＜事実＞読みの二つの解釈がありうることを前提としている[3]）。

また、森山（1992）の「主観明示用法」に関し、宮崎（1999）は、話し手の評価を表す場合と話し手の意向を表す場合とで、「と思う」の除去（あるいは付加）による影響が大きく異なると述べている。

まず、例文（3）や「～べきだと思う」のような、話し手の評価を表す場合については、森山と同様、「と思う」を取り去っても文の意味が大きく変わることはないと結論付けている。それに対し、「～たいと思う」「～しようと思う」のように引用成分が話し手の意向を表している場合には、「と思う」の除去により大きな意味の変化が生じるとしている。

（5）　今年の夏は海外旅行に行こうと思う。
（6）　今年の夏は海外旅行に行こう。
　　（宮崎（1999）の例文（20）（20´））

ここで、（20）と（20´）の違いを確認するなら、まず＜誘い掛け＞にも使えるのは後者だけだという違いがあるが、＜意志＞を表す文としても、後者が話し手の意志をその場で直接表出する文であるのに対して、前者は話し手が予め心中に抱いている意向を予定として聞き手に伝える文である（その点で「ツモリダ」に近づいていると言える）、という違いがあると言える。その証拠に、「今年の夏は何をするの？」という質問に対する応答としては、（20）が選択されるだろう。

[3] この点については、田野村（1990）における＜推量判断実践文＞と＜知識表明文＞の区別も参照。

（宮崎（1999：10）、注７を括弧に括り挿入）

例えば、談話場内における意志の変更を表す場合（例文(7)）や、<行為提供の申し出>（仁田（1991：212））を表す場合（例文（8））は「しようと思う」が使いにくい。これは、いずれの場合も、予定を述べるのではなく、その場での意志決定を表明するのが適切な場面だからである。

(7) A：私、これから買い物に行くんだけど。
　　B：じゃあ、私も｛行く／行こう／??行こうと思う｝。

(8)　その鞄、｛お持ちしましょう／＊お持ちしようと思います｝。

宮崎（1999）は、あらかじめ心中に抱いている内容を伝えるという点では、「～たいと思う」「だろうと思う」にも同様のことが言えるとし、このような（「と思う」の付加により生じる）意味的相違は、「と思う」を伴わない文が思考内容そのものを差し出す文であるのに対し、「と思う」を伴う文は思考内容を内省して伝える（先んじて心中に存在する思考をモニターして述べる）文であることによると述べている（「と思う」に関する以上の指摘は、<思考内容を><意識する>という高橋（2003a）の意味記述とも合致する）。

以上、先行研究の指摘のうち、根幹をなす部分に絞り、「と思う」の特徴を概観した。まとめると、宮崎（1999）の主張は、以下の二点において森山（1992）と異なる。

①「不確実表示用法」の「と思う」は<事実>を<判断>化するのではなく引用成分が<判断>であることを明示する形式である。

②<表出>文に対する「と思う」の付加は（聞き手の存在を前提としない）<表出>から（聞き手への情報伝達を意図する）<述べ立て>へと聞き手めあてのモダリティを変更する（意味の変更を伴う）操作である。

4. 引用節を伴う「思う」の意味

前節では、主要な先行研究を参照しながら、基本形で文末に用いられた「と思う」が示すさまざまな振る舞いについて概観した。本節では、高橋（2003a）の記述に基づき、引用節を伴う「思う」の（本動詞としての）意味を確認する（ヲ格名詞句を伴う「思う」の意味については高橋（2002、2007）を参照）。

結論から述べれば、引用節を伴う「思う」の意味は、大きく二つに分けることができる。すなわち、多義語ということである（以下、多義語が表す複数の意味を「別義」と呼ぶ）。

4.1 別義１

別義１は、概略、以下のように記述される（なお、実例中の下線は引用者によるものである）。

・別義１：<（外部からの刺激により）主体内部に生じた感情・感覚を><意識する>

別義１の「思う」は、引用成分が<感情>、あるいは<感覚>を表している場合である。以下の例はいずれも引用成分が<感情>であるが、「暑いと思う」のように、引用成分が<感覚>を表すこともある。また、別義１は、「思う」がある種の<反応>であるという特徴を色濃く反映している。以下の例はいずれも、何らかの刺激によって生じた反応（心の変化）を表している。そのような特徴により、別義１の「思う」は、類義語である「考える」に置き換えることができない。

(9)　「若い男よ。――なかなかハンサムだったなあ」
　　「何か特徴は？」
　　「そんなのないわよ。なんとなくしか憶えてないもの。ただ、いい男だな、と<u>思った</u>ことを憶えてるだけ」
　　（『女社長に乾杯！』p. 823）

(10)　振り返るとバフィーが突っ立っていて、その横には豊かなあごひげをたくわえた大男が並んで私を見下ろしていた。あれれと<u>思い</u>、バフィーの顔を覗き込むと、<以下省略>。（『若き数学者のアメリカ』p. 213）

(11)　「ごめんなさい、てっきりパパかと<u>思った</u>の。あなたパパのお使い？」
　　（『女社長に乾杯！』p. 206）

4.2 別義２

別義２は、概略、以下のように記述される。

・別義２：<主体内部に存在する判断内容を><意識する>

ここでの<判断内容>とは、「主体の意志的な思考活動によって導かれた内容」を指す。以下の例からもわかるように、引用成分の背後には主体の意志

的な思考活動が想定され、これは別義１の＜反応＞とは対照的な特徴である。このような事情により、別義２の「思う」は「考える」への自然な置き換えが可能である。

(12)　三階を選んだのは、最上階であるから天井からの物音に悩まされることがあるまいと思ったからである。

（『若き数学者のアメリカ』p. 301）

(13)　三人のうちの一人である。もちろんそれでホームタウン・デシジョンが防げるはずはない。しかし、日本人のジャッジ・ペーパーが一枚でも残っていれば、優勢にもかかわらず判定負けを喫したとしても内藤の健闘は理解されると思ったのだ。

（『一瞬の夏』p. 1064）

4.3 別義間の関連性

本節の最後に、別義１と２の関連性について考察する。なお、別義間の関連性は、「隠喩」「換喩」「提喩」という三種の比喩により記述可能であることがこれまでの研究で明らかとなっている。本稿でも、別義間の関連性を比喩によって捉えるという立場をとる。以下の分析では主に隠喩と換喩が重要な役割を担うが、本稿では次の定義に従ってこれらの用語を用いることとする。

隠喩：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

換喩：二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。（籾山（1997：31））

ここで、「思う」の別義１と２の関連性に目を転じると、別義１と２の引用成分＜感情・感覚＞と＜判断内容＞は、（どのような過程を経て生じたのかという点については異なるものの、）いずれも＜主体内部に生じた内容＞であることに変わりはない。つまり、「思う」は＜主体内部に生じた内容＞であれば、これといった制限もなく引用節にとりうるということである。＜主体内部に生じた内容＞のうち、＜（刺激による）反応＞といった側面が強い場合は別義１に、主体の意志的な思考活動により生じた＜判断内容＞であれば別義２に、それぞれ分化することになる。

以上の議論を比喩の観点から捉え直すと、別義１と２はいずれも引用成分が＜主体内部に生じた内容＞であるという点で共通している[(4)]ことから、隠喩に基づく関係にあると言える。

5. 基本形文末用法の「と思う」の位置付け

本節では、前節までの議論を踏まえ、基本形文末用法の「と思う」の位置付けについて検討する。

「と思う」を位置付けるにあたり、まず問題となるのは、（１節でも述べたように）「と思う」の意味を本動詞の意味と同等に扱うべきかどうかという点である。

また、加えて考慮すべきは、３節で概観した「と思う」の表現性は「思う」固有のものではないという点である。

(14)　私は景気はよくなると思う。

(15)　私は景気はよくなると考える。

(16)　私は景気はよくなると信じる。

（宮崎（2001）の例文（4）（5）（6））

工藤（1995：91）はこれら思考動詞の基本形が表すムード性を＜態度表明性＞（＝「話し手の思考的態度を聞き手に向けて表明するというムード性」）としている。宮崎（2001）はこれを受け、「と思う」の基本的意味を＜態度表明性＞に求めている。すなわち、文末の「と思う」が示す意味は「と思う」固有の意味ではないという結論である。

さて、このような諸事情は、「と思う」の意味を「思う」の語義として認定することを躊躇させる要因であるかのように思われるが、本稿ではそれでもなお「と思う」の意味を「思う」の語義の一つとして認定する立場をとりたい。その際、拠り所となるのは「と思う」の定着度（顕著性）の高さである。「と思う」は単に＜主体内部に生じた内容を＞＜意識する＞という語義的特徴の希薄さゆえに、（より豊かな意味特徴を有する「考える」や「信じる」に

(4) このような、別義間に共通して見出せる意味を、高橋（2003a）では「基本的意味」、高橋（2007）では「スキーマ的意味」と呼び、多義構造を記述する上での重要な概念として位置付けている。しかし、本稿では紙幅の都合上、スキーマ的意味に関する議論は行わないこととする。

比べ）特別な含意を伴うことなく話し手の意見を表明することができる[5]。また、引用成分に関する制約が少ないため、他の思考動詞よりも使用域が広い（cf.「＊｛～しよう／～したい｝と信じる」）。このような諸特徴を背景に、「と思う」は話し手の思考内容を伝達する代表的な形式として頻繁に用いられている。

また、「と思う」が表す意味は本動詞の意味に＜態度表明性＞が加わったものであって、それ自体（＝「本動詞の意味＋＜態度表明性＞」）を本動詞の意味と同等に扱うべきではないとする見方がある一方、これらの意味を別物と考えず一つの多義構造内に共存させるという（使用依拠モデル的）見方もありうる。前者の見方には、おそらく、内容語が表す意味と機能語が表す意味の異質性に対する意識が働いていると思われるが、後者の見方をとった場合、このような内容語と機能語の意味的相違はあくまで程度問題であり、両者の間に連続性を認めることになる。

形式面に関して言えば、ここで問題としている意味（＝「本動詞の意味＋＜態度表明性＞」）はあくまで「と＋思う（基本形）」という形式全体が担っているものであるとも考えられる。すなわち、「と思う」にかかる 統語的・形態的制約は、「と思う」を本動詞と区別して扱う立場を支持する要因になりうる。但し、語義が異なればそれに応じて統語的振る舞いも異なる（異なる語義には異なる制約がかかる）という現象はしばしば見られるものであり、それだけで本動詞の意味と厳密に区別しようとするのは拙速である。本稿で扱っている他の別義も引用節を伴う「思う」に限定の意味であり、統語的制約の面では「と思う」と同様である。加えて形態的制約が観察される場合であっても、本動詞との関連性が十分に認められれば、その部分を重視するというのが本稿の立場である。[6]

本稿では、以上のような立場にたち、「と思う」の位置付けを考えてみたい。

まず、これまでの検討結果を総合し、「と思う」の意味を以下のように記述する（なお、以下の別義３は、３節で概観した「と思う」のヴァリエーションの共通性を取りだした一般性の高い意味である）。

・別義３：＜主体内部に存在する判断内容を＞
＜表明する＞

別義３は別義２の存在を前提にしている。すなわち、＜主体内部に存在する判断内容を＞＜意識する＞という行為の後かあるいはほぼ同時に＜判断内容を＞＜表明する＞という行為が行われるということである。これを比喩の観点から見直すと、別義２と３の間には換喩に基づく関係（時間的隣接関係）が成立していると考えることができる。

別義３が別義１ではなく別義２と関連付けられることは、以下の例を参照することにより明らかとなる。

（17）a　「どうなんだろう。いつということはなかったんじゃないかな。仕事をやめて、毎日ジムに通うのを見て、オヤッと思ったんだろうな。＜以下省略＞」
（『一瞬の夏』p. 85）

b ＊毎日ジムに通うのを見て、オヤッと思う。

（18）a　「ごめんなさい、てっきりパパかと思ったの。あなたパパのお使い？」
（例文（11）を再掲）

b ＊てっきりパパかと思う。

（19）a　彼なら突如としてマイコのそばに行って、「ぼくは君のことがとても好きなんだ。だから交際してください」などというぐ

---

[5]「と考える」は、日常の会話では使われにくく、かなり改まった場面に使用が限定されている。
（ア）彼はもう大学に来ている｛と思います／??と考えます｝。
（イ）その主張は妥当なものではないと考えます。
これは、「考える」が常に背後に意志的な思考活動の存在を含意するため、「考えた結果がこれだ」といった強い主張になりすぎるためではないかと思われる。

[6] 例えば、動詞「わかる」は「わかった」という形（つまりタ形限定）で＜承諾＞を表すことがあるが、高橋（2003b）ではこれを「わかる」の別義の一つとして認定している。なお、この種の意味は、＜依頼・命令内容を理解したことを示す＞→＜承諾＞のような語用論的推論として処理される（つまり語義とは認定されない）ことがあるが、本稿が立脚する認知言語学的意味観では、そもそも意味論と語用論との明確な区別は不可能であると考える。この立場で問題とされるのはあくまで定着度である。すなわち、ある形式と意味との結びつきが十分に慣習化しているか、それとも臨時的なものなのかという点が、語義として認定するかどうかの目安となるのである（なお、語用論的推論は換喩（時間的隣接関係）に基

らいのことは難なくやってしまうだろうと思った。

（『新橋烏森口青春篇』p. 102）

b　「ぼくは君のことがとても好きなんだ。だから交際してください」などというぐらいのことは難なくやってしまうだろうと思う。

(20) a　しかし、日本人のジャッジ・ペーパーが一枚でも残っていれば、優勢にもかかわらず判定負けを喫したとしても内藤の健闘は理解されると思ったのだ。

（例文（13）を再掲）

b　判定負けを喫したとしても内藤の健闘は理解されると思う。

別義１の例である（17）（18）は基本形が容認されないのに対し、別義２の例である（19）（20）は基本形が問題なく容認される。これは、別義２と３の引用成分がいずれも持続性を有する内容であることに起因する（別義３が持続性を有していることは、状態動詞と同様、基本形で現在時を表せるという形で表面化している）。ここから、別義２を基盤として、別義３が成り立っているとするのが自然な関連付けであると思われる。

6. おわりに

以上、基本形文末用法の「と思う」について、先行研究の記述を整理した上で、多義構造内への位置付けを試みた。このような位置付けは、「と思う」の意味を他の別義と同等に扱っている点で、従来の研究と異なるものである。「基本形」「文末」のように、多少使用条件に制限がある場合であっても、十分な定着度を有し、かつ他の別義との間に直接的な関連性が認められれば、積極的に「別義」として扱う、というのが本稿の立場である。

但し、（単なる過去における思考活動の記述ではなく）「予想通り」（例文（21））、「納得」（例文（22））といった、＜認識と現実の関係づけ＞（宮崎（2001：128））を表しているケースや、「～と思うと…」のような複合形式（例文（23））をどう扱うかは微妙な問題である。

(21)　「絶対引き受けるべきよ！」
「そう言うと思ったわ」

（『女社長に乾杯！』p. 798）

(22)　「エアコン壊れてるんだよ」
「どうりで暑いと思った」

(23)　その瞬間、リング上の羽草は前のめりになり、ガクッと膝を折ったかと思うと、キャンパスに両手をついた。

（『一瞬の夏』p. 998）

このような、構成要素の総和以上の意味が認められる事例については、形式全体を一つの「構文」（＝「語よりも大きい単位を含む、意味と形式の対応物」）として扱うのが適当である。「思う」の別義３の下位に位置づけられる「と思う」のさまざまな具体事例も、個別に説明が必要である点で構文的性質を有するが、本稿では、そのような個別性を捨象したスキーマ的（一般的）意味を別義３として設定することにより、別義２との直接的な関連付けを確保した（「と思う」の構文としての側面と、「と思う」における動詞「思う」の意味的貢献の双方を同時に捉えようとした）わけである。

例文出典

『ＣＤ－ＲＯＭ版　新潮文庫の100冊』

文　献

1) 小野政樹（2005）『日本語態度動詞文の情報構造』　ひつじ書房

2) 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』　ひつじ書房

3) 高橋圭介（2002）「類義語『思う』と『考える』の意味分析―類義関係にある語の多義記述試論―」　『日本語文法』２巻１号　日本語文法学会　pp. 190-210

4) 高橋圭介（2003a）「引用節を伴う『思う』と『考える』の意味」　『言葉と文化』４号　名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻　pp. 99-114

5) 高橋圭介（2003b）「類義語『しる』と『わかる』の意味分析」　『日本語教育』119 号　日本語教育学会　pp. 31-40

6) 高橋圭介（2007）「現代日本語における思考動

づく意味拡張の一種として説明可能である）。

詞の意味分析」　名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻博士学位論文
7) 田野村忠温（1990）「文における判断をめぐって」　崎山理・佐藤昭裕（編）『アジアの諸言語と一般言語学』　三省堂　pp. 785-795
8) 辻　幸夫（編）（2002）『認知言語学キーワード事典』　研究社
9) 宮崎和人（1999）「モダリティ論から見た『～と思う』」　『待兼山論叢(日本学篇)』33号　大阪大学大学院文学研究科　pp. 左 1-16
10) 籾山洋介（1997）「慣用句の体系的分類―隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に―」『名古屋大学国語国文学』80号　pp. 29-43
11) 森山卓郎（1992）「文末思考動詞「思う」をめぐって―文の意味としての主観性・客観性―」『日本語学』11巻9号　明治書院　pp. 105-116
12) 森山卓郎（1995）「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～　―不確実だが高い確信があることの表現―」　宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）単文編』　くろしお出版　pp. 171-182
13) 湯本久美子（2005）『日英認知モダリティ論－連続性の視座－』　くろしお出版
14) ラネカー, R. W.（2000）「動的使用依拠モデル」（坪井栄治郎訳）　坂原茂（編）『認知言語学の発展』　ひつじ書房　pp. 61-143
15) Hopper, P. J. and E. Traugott (1993) *Grammaticalization.* Cambridge University Press.
16) Yokomizo Shinichiro (1998) 'Believing, Wanting, and Feeling: Three Representational Modes of Embedded Propositional Contents'『世界の日本語教育』8号　国際交流基金　pp. 167-189